

# 苦しい学びは続かない

柳川範之

(経済学者)

学校や塾へ通わずに独学で大学受験に挑み、見事慶應義塾大学に合格。その後も独自の学びを続け、いまや東大大学院で教鞭を執るという異色の経験をもつ柳川教授。著書『東大教授が教える独学勉強法』などで独学の意義を説く氏に、その独学哲学を聞いた。



勉強はできるうちにしておいたほうがいい——ポプスの一節になるほどありふれているこんな警句は、ひよっとしたらもはや有効期限切れなのかもしれない。「できるうち」と期間を区切るのが難しくなっているからだ。平均寿命の伸びと比例するかのよう定年年も年金支給開始年齢も引き上げられ、終身雇用も

過去のものとなるなか、私たちは幾度かのキャリアチェンジを経ないと、生涯を穏やかに全うすることも難しくなりつつある。知識や思考をアップデートし続けるためには、勉強はずっと継続しなければならぬ。つまり望もうと望むまいと、勉強は「いつまでも」したほうがいいものに変わってきているのだ。

## 目標は達成できなくていい

であれば、学ぶことを趣味にできれば言うことではない。少し前には大人のための「教養」や「リベラルアーツ」といった言葉がもてはやされ、ここ数年では「独学」が静かなブームだと言われている。ポジティブな動機による学びを求める人が増えているのだろう。

ただ、「しておいたほうがいい」という警句が有効だったのは、できれば勉強したくない人が大半だったからでもある。今も昔も、勉強は苦痛のタネなのであり、自らの意志の薄弱さを思い知らされる機会でもある。ましてや教師も見張りもない独学が、簡単にうまくいくものなのか。

「そんなにうまくできるわけではないんです。計画したこと八割はできません」

あっさりとする語るのは、東京大学大学院経済学部の柳川範之教授だ。高校に通わず一人で学び、大検（大学入学資格検定試験）を経て慶應義塾大学の通信教育課程に入学し、のちに東大大学院教授にまでなった人物である。柳川教授が二〇〇九年に上梓した『独学という道もある』（筑摩書房）は、「独学ブーム」の先駆けとなった一冊だ。そんな柳川教授にして「うまくできるわけではない」とは、いったいどういうことなのだろうか。

中学校卒業と同時に父親のブラジル転勤が決まった柳川教授は、現地サンパウロの高校に通わずに、「独学」で勉強することを選んだ。小学五年から中学一年の途中まで、やはり父親のシンガポール転勤に際して現地の小学校に通った経験が、この決断をあと押ししたという。

「一九七〇年代はすでに受験戦争も始まっていたので、日本では塾通いする小学生も増えていました。しかし、当時のシンガポールには塾もなく、学校のほかは親に教えてもらうのが関の山です。それでもなんとかあったという実感が、親子ともにあったのだと思います」

父親の助言もあり、とりあえずは公認会計士の資格取得を目標とし、柳川少年の独学は始まった。その後の経歴を見れば、さぞかし綿密な計画を立て、強い意志でノルマを消化していったのだろう……と想像してしまいが、現実は少し違ったようだ。

「数学の参考書と一緒に、簿記や会計の入門書も日本から持っていましたので、一応は会計士を目標にはしていました。仮のゴールはあったほうがいいだろうという程度のもので、強いモチベーションはなかったと思います。実際

にしばらくは、近所の小学生とサッカーをしたり、大人とテニスをしたり、街をブラブラしたりして勉強はしていませんでした。でもどこかで『このままじゃまずい』とは思っていたので、それが最後のアンカー（錨）にはなっていたのだと思います。ある程度の年齢になっていけば、外から強制されなくてもなんらかのモチベーションが湧いてくるのではないのでしょうか。私も子を持つてみて、自然にやる気が湧くまで待つということがどれだけ難しいか痛感しましたが」

危機感に駆り立てられ、目標達成のための学習計画を立てて、やり始めてみる。しかしすぐに計画倒れとなる。当初はそんなことの繰り返しだった。

「それはもう、失敗だらけです。たとえば一冊の参考書が一二章構成であるとして、一週間に一章ずつ進めれば三カ月で一冊終わらせることができる、などと考えてしまいがちですよ。ところが、これが失敗の原因となるんです。実際には自分にとっては難しい章もあれば簡単な章もあり、重要度も章によって違うわけで、思ったようには進みません。計画通りに進まないのは学習速度が遅いのだと考え、理解していきながら進まないが一週間一章終わらせて、とにかく次に進むようになる。これでは、まるつき